

赤谷の森から

【増加する前にシカ対策】

近年のニホンジカ（以下「シカ」という。）の個体数の急激な増加及び分布域の拡大は、農林業への被害だけではなく、自然林の世代交代を妨げ、土壌の流亡を引き起こし、植物やそれに依存する昆虫など多くの生物種の減少や地域的な絶滅を招くなど、生態系や生物多様性の保全上でも重大な脅威となっております。

赤谷の森（群馬県みなかみ町新治地区の国有林1万鈔）では、現在、シカの侵入初期段階（低密度）ではあるものの、毎年行っている哺乳類の調査等では年々個体数の増加を確認しています。こうした中、赤谷プロジェクト哺乳類ワーキンググループ（以下「哺乳類WG」という）では、シカへの総合的な対策の検討及びその成果を発信すべく、各種の取り組みを行っています。赤谷森林ふれあい推進センター（以下、「赤谷センター」という）では、低密度下の捕獲に当たりシカとの遭遇の可能性が低いことを考慮して、誘引（おびき寄せ）による捕獲が効果的であることから、小出俣林道沿いのスギ林内2箇所

に試験地を設け、平成27年度からシカの誘引試験として、鉋塩（家畜用の塩やミネラルのかたまり）とヘイキューブ（牧草のかたまり）を設置し、センサーカメラによりモニタリングを続けてきました。平成29年度までの3年間の結果を見ると、赤谷の森に生息するシカは、鉋塩は舐めるもののヘイキューブには興味を示さないことが分かりました。ヘイキューブに興味を示さないのは、赤谷の森には餌となる植物が沢山あるからと思われる。鉋塩を舐めるシカの出現回数は年を追う毎に増え、平成27年度には10日に1回程度であったものが平成29年度には2日に1回程度まで増えました。また、月別では5月と11月に多く出没することが分かりました。



鉋塩をなめるシカ

これらを踏まえ、哺乳類WGで検討する中で、プロジェクトのメンバーである（公財）日本自然保護協会により林内設置型囲い罠と箱罠を各1箇所、赤谷センターにより誘引試験箇所2箇所にくくり罠（三生製スーパーマグナム）を各3機計6機それぞれ設置し、10月29日から11月14日まで捕獲試験を行いました。

なお、実施にあたっては、哺乳類WGのオブザーバーである群馬県林業試験場主任研究員の坂庭氏から技術協力を受けるとともに、地元猟友会への説明会を開き理解を得て行いました。

結果、林内設置型囲い罠及び箱罠は、侵入初期段階のシカは警戒心が強いためか、設置後からシカがセンサーカメラ



くくり罠の設置

らに映らなくなりました。罠になれるまで時間がかかると考えられます。くくり罠は、実施3日目にシカが罠の縁を踏んでカラコバキがありスレジカになってしまふことを心配しましたが、10日目に当歳（0歳）のオスジカの捕獲に成功しました。また捕獲後もシカの出現があり、一度捕獲した箇所でも再度捕獲できる可能性を確認できました。今回試みた誘引捕獲に一定の成果が出たことで、低密度下におけるシカ対策の一步が踏み出せたものと考えています。

なお詳細は2月に関東森林管理局で行われる森林・林業等交流発表会で発表します。



設置後に土をかけた状態